序

昭和五九年（一九八四）に白百合女子大学に勤めることができて、この三月に定年を迎えることになりました。その間、研究会、学会、また、出版などのさまざまな仕事をとおして、大勢の研究者の方々と出会い、多くの刺激を受けて自分の研究を深めることができたことは、一研究者として大きな喜びです。

また、私のもとで続けてきた研究会の若い方々（当時は大学院生でした）が、研究会で切磋琢磨して、一人前の研究者として育ってゆく様子を見守ることができたことも、幸せな体験でした。コロナ禍と私の家庭の事情のためにしばらく中断していましたが、昨年から少しずつ始めることができるようになりました。

定年を迎えるにあたって、これまでの自分の研究の成果をまとめたいと思って仕事を進めてきましたが、それと同時に、私のまわりにいて私を導いてくださった方々とともにそれぞれの研究成果を持ち寄って一冊の論集にしたいと考えて、本書を企画いたしました。

幸いなことに長年親しくしてくださった方が本書の発起人を引き受けてくださったので、その方々と相談のうえ、三十人程度の方に執筆をお願いして、論文を寄せていただくことができました。ご校務等でお忙しいなかでご執筆くださったことに感謝しています。

いま一つ、これまで私が書きためたものも一冊にまとめて同時に出版できたらかっこいいなと考えて進めていたのですが、残念ながら間に合いませんでした。いずれかたちにできたらと思います。

今振り返ってみると、長い研究者生活でした。学恩を受けた多くの方々のお顔が浮かびます。などと書くと、もうこれでお終(しま)いかのようですが、これを一区切りとしてまだまだ研究を先に進めたいと思っています。

最後に、私のわがままを聞き入れて発起人となってくださった方々、そして、快く出版を引き受けてくださった前田智彦社長をはじめとする武蔵野書院の皆さまに、「ありがとうございます」の言葉をお送りいたします。

令和六年（二〇二四）一月

室　城　秀　之

あとがき

室城秀之氏は二〇二四年三月をもって白百合女子大学を定年退職なさいます。時の過ぎる早さに感慨を懐かずにはいられません。本書は、長年にわたる研究・教育活動の節目における記念の論文集として企画されました。

室城氏は「古典文学を読む際には言葉に対する正しい知識と理解が必要である」ということを折に触れておっしゃっています。本書の編集にあたってもそうした氏の強い信念が打ち出され、賛同した方々がそれぞれの思いを込めて筆を執られたことと思います。

室城氏は、『うつほ物語』をはじめ『源氏物語』、『落窪物語』、『古今和歌六帖』その他平安時代の物語や和歌集を中心に数々の研究成果を挙げられています。一九九五年上梓の『うつほ物語　全』（おうふう）はもちろん、二〇一一年刊行の『源氏物語大辞典』（角川学芸出版）その他辞典・事典類など、世の研究・教育の場でこれからも長く読み継がれていく書ばかりです。最新の成果の一例としては、現在刊行中の角川ソフィア文庫『新版うつほ物語』（全六冊）があります。何れを拝見しても、作品の言葉への正確な認識と緻密な読解力によってなされた魅力ある書であることがわかります。

これらの研究のみならず、高等学校国語教科書の編集、そして高校生向けの古語辞典の編集にも携わり、教育の分野においても大きな足跡を残していらっしゃいます。教科書編集にまつわるエピソードについては、本書発起人の一人（小森）のエッセイを御覧いただければ、と思います。

さらに、中古文学会をはじめとして全国大学国語国文学会、日本文学協会、物語研究会その他多くの学会に所属なさり、学会の発展に力を尽くされています。特に二〇一一年～二〇一二年には白百合女子大学に中古文学会事務局が

置かれ、室城氏が代表委員をお務めになりました。二〇一一年と言えば、三月に東日本大震災があり、その影響も残る中、通常とは異なった状況での学会運営スタートとなったことが思い出されます。氏は、終始こまやかな配慮と果敢な実行力をもって委員会その他諸々の学会運営の合理化をお進めになりました。

本務校では、図書館長、学科長などを歴任なさり、現在も言語・文学研究センター長の任にあります。縁あってお仕事ぶりを側で拝するにつけて、さぞ大変な思いもなさり、お疲れでいらっしゃることもあろうと思われたのですが、どのような時でも積極的かつ柔軟に対処していらっしゃいました。しかも、「疲れた」という言葉を耳にしたことはありません。否定的な言葉をおっしゃらないだけでなく、「怒り」を人に見せるようなこともなかったように思います。

次に、教育者としての室城氏の横顔も少しだけ記しておきたいと思います。温厚なお人柄を慕う学生が研究室をよく訪ねていたことも思い出されます（学生諸君を迎えていた縫いぐるみのミッフィーたちは、これからは何処に居場所を求めるのでしょう）。特に文学研究に熱意を持つ学生のための研究会を主催なさったので、そこには本務校の白百合女子大学以外からも多くの参加者が集って、よき研鑽の場となりました。今回本書にご寄稿を賜ったのは、室城氏の思いを理解し、あるいは薫陶を受け、あるいは研究・教育の場を共有した経験を持っている方々です。

常日頃より作品の言葉を大切にして真摯に読み込む（紙背を読むとはこのようなことかとしばしば感じます）ということを実践なさっていますが、決して孤高の研究者というわけではありません。誰に対してもそれぞれの立場や個性を尊重なさるので、周囲には先生を慕い志を同じくする研究者や学生たちが集い、氏もそのことを楽しみとしていらっしゃったのだと思われます。けれども、そうした時間が永遠に続くわけではなく、とうとう、一九八四年四月着任なさって以来長くお勤めになった白百合女子大学を「卒業」なさることになりました。定年退職は、新たなステージの始まりでもあります。今後も新しいステージでの室城氏の御活躍を期待するとともに、変わらずに私たちを導いてくださることを願っています。

最後に、執筆者の皆様、また本書の企画に賛同し編集・出版をお導き下さった武蔵野書院の前田智彦社長をはじめスタッフの皆様に、発起人一同心より御礼を申しあげます。

二〇二四年一月末日

発起人　小森　潔
鈴木裕子
三浦則子
吉井美弥子